



2009年6月24日放送

漢方医人列伝「香月牛山」

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 医長 齋藤 絵美

香月牛山は京都および福岡県小倉で活躍した、江戸中期の後世派の第一人者です。1656年（明暦2）、筑前国遠賀郡、すなわち現在の福岡県に生まれました。香月家は400年間にわたり香月城主として続いた家柄でしたが、牛山より4代前の代に小早川隆景に征せられました。その後は代々百姓として家を継いできましたが、牛山の父の代には家も栄え酒造業を営んでいました。

牛山は若い頃、貝原益軒に儒学を学び、現在の大分県にあたる豊前中津侯の藩医、鶴原玄益に医学を学びました。1685年（貞享2）、30歳のとき豊前中津侯小笠原氏の侍医となりましたが、この頃にはしばしば貝原家に入出入りして、益軒の妻が重病を患った際には治療に当たることもあり、牛山と貝原家とは弟子としてまた主治医として深い親交がありました。その頃から名医として知られていたようです。

その後1699年（元禄12）、44歳の時に京都に出て開業しましたが、その際多くの医者が治せなかった大覚親王の病気を、天皇からのご命令で治療することになり、見事に治したことから更に名医としての名が高まりました。この京都在住中は患者の診療のみならず、多くの文化人との交流も行い、知識を深めた時期でした。1716年（享保元）、61歳のとき小倉侯小笠原氏に招聘されて小倉に住居を移し、晩年を過ごしました。

牛山が活躍した江戸時代中期は、江戸初期までの明の医学文化受容を基盤に、日本漢方の独自化が一気に進んだ時代です。一般向けの啓蒙医書、日本人独自の中国医籍注釈書、あるいは養生・鍼灸・本草・博物学へと展開し、それらが江戸時代の医学文化を作りました。活字印刷技術の普及による出版事業の隆盛もあり、日本医書の刊行数は爆発的に増加しました。この時代は古方派が活躍を始めた頃ですが、牛山は曲直瀬道三（まなせ どうさん）によってまとめられた金元医学を主とする後世派で、中でも李東垣の影響を強く受けています。同時代に活躍した漢方医には後藤良山（1659-1733）、岡本一抱（1655-1716）、北尾春圃（1659-1741）などがいます。

牛山は京都時代、小倉時代に非常に多くの著書を残しています。それらのほとんどは仮名まじり文で、当時の大衆への啓蒙に努めていたと言われていています。1779年に出版された『牛山活套』は「感冒」「傷寒」からはじまり、症候別に治療法を解説していますが、この中の「婦人部」という女性特有の疾患について解説したページに、「婦人産後は気血を補うべし。産後血の道持とて生涯病者なる者あり」と書かれています。「血の道」という言葉は、現在も女性特有の精神神経症状や身体症状に対して使われますが、この言葉は、この頃から広く使われるようになったと考えられています。一方、1782年に出版された『牛山方考』は、処方毎の臨床での使い方を多くの加減方とともに解説しています。牛山の用いた処方、『和剂局方』『万病回春』などからのいわゆる後世派の処方が中心ですが、それに加えて家伝の秘方なるものも使われていました。この家伝の秘方は、香月家14代城主の時に朝鮮の医師や日本の他家から集められたものであり、「神通湯」、「消痞丸」、「保童円」などがそれにあたります。

ところで、日本の本草書には香川修庵の『一本堂薬選』、吉益東洞の『薬徴』、浅田宗伯の『古方薬議』などがありますが、これらはすべて古方派の医説からみた本草書であり、牛山の『薬籠本草』（1728）は我が国において金元医学の医説に立脚した本草書であります。この『薬籠本草』では、李時珍の『本草綱目』などを参考に、常用薬物100種について諸家の薬理の説をあげ、それに牛山自身の治験例を示しています。

また、「養生三部作」とされる『婦人寿草』（1692年）、『小児必用養育草』（1703年）、『老人必用養草』（1716年）は、一般並びに医家向けに実地に応用できる立場に立って書かれており、当時数度にわたって再版されています。この中で『婦人寿草』は、当時の代表的な産科書であり養生書と言われていています。全6巻から成り、女性の妊娠・出産に関する養生について、『婦人大全良方』（1237年）や『女科証治準繩』（1607年）をはじめとした非常に多くの中国の古典を引用して述べています。

第1巻は「求嗣の説」すなわち不妊症に関する解説からはじまり、妊娠に適した年齢、家や墓を作る方角、先祖の供養の大切さなどについて述べ、酒を飲んで夫婦生活を持つことを戒め、「夫婦の心行、保養をつつしみて、道にかなふときは子を生ぜずといふことなし」としています。また、不妊の原因は女性側ばかりでなく男性側にもあるということを劉宗厚の言葉を引用し「子なきの因、多くは父の陽気不足におこる。しかるを、ひとり罪を母

の血の不足に帰する事はあやまりなり」と解説しています。現在、不妊症の夫婦のうち半数近くは男性側に問題があると言われていますが、当時からそのような見解があったことがわかります。不妊症に用いる処方については、現在も使われているものとしては六味丸・八味丸に関する記述があり、「六味、八味の地黄丸この二方に加減したる方、中花より本朝にいたり甚だ多し」と書かれています。

第3巻以降は妊娠中・出産・産後の養生について順に書かれています。「胎教の説」では妊娠中は常に正しい姿勢を保ち、正しいものを食べ、好ましくない光景は見ず、みだらな音楽は聴かず、楽人を呼んで詩をうたわせ、正しいことを話させれば、生まれてくる子は容姿端麗で、人より優れた才能を持つと書かれており、現在の胎教に通じるところがあります。ちなみにこの「胎教」という言葉は同時代に書かれた中江藤樹の『鑑草』(1647年)や稲生恒軒の『蝨斯草』(1690年)でも解説されており、江戸時代にはすでに胎教に関して人々は関心を持っていたようです。また、「妊婦、火災のとき出て火をみるべからず。心気を驚動して胎気やすからず。生子かならず身中に赤痣出来もの也。」と書かれており、妊婦は火事を見ては行けないという言い伝えはこの頃にもあったことがわかります。妊娠中を安らかに過ごすために、火を見るなど精神を過度に刺激しないようにと説いているのです。

この他にも今でも伝えられている内容から、この時代特有の風習まで、妊娠中の養生、心構えについては数多くの記述があるのに対し、異常分娩への対応に関する記述は限られています。

実は、これにはこの時代の産科学の実情が関連しています。というのは、近代産科学の発展は牛山の時代の少し後に活躍した賀川玄悦から始まります。賀川玄悦は異常分娩に対する外科的手技、たとえば、いわゆる「回生術」と言われる穿頭術、つまり難産の際に母体を救命するために鉄製の鉤を用いて胎児を取り出す技術を開発しました。また、妊娠中の正常胎位が頭を下にした頭位であると初めて指摘したのも賀川玄悦です。これらは牛山の没後25年たった1765年に発表された『産論』に記載されています。また、華岡青洲が通仙散で全身麻酔を施行したのは1804年、日本初の帝王切開が行われたのは牛山没後100年以上も後の1852年です。

つまり牛山の時代は、妊娠中の胎児の正常な位置もわからず、難産に対しても外科的手段を持たなかったのです。そのためこの書物に記載されているように仏手散ですとか補中益気湯、平胃散などを催生の薬、つまり陣痛促進剤として与え、按摩をし、至陰に灸をし、合谷に鍼をし、あとは祈るばかりであったと思われます。

このような時代に活躍した牛山は、85歳の天寿を全うし、1740年3月16日に亡くなりました。現在、牛山の墓は北九州市小倉北区の円応寺と、八幡西区香月の吉祥寺にあります。